

『源氏物語』における『遊仙窟』の受容

——「若紫」の巻に着目して——

蔡 芸

はじめに

『源氏物語』の「若紫」の巻と『遊仙窟』の受容関係は、既に指摘されている⁽¹⁾。特に、丸山キヨ子氏の、「源氏物語の場面に遊仙窟がヒントを与えているのではないかと思われるところは二つある。若紫の巻、北山における源氏君の垣間見、橋姫の巻、宇治の山荘における薫の垣間見の場面である」という指摘⁽²⁾が有効だと思われる。しかし、「若紫」の巻において、『遊仙窟』の引用はただ筋・展開を真似ているだけなのだろうか。本論は、「若紫」の巻と『遊仙窟』の受容関係をさらに明らかにする。

一 「若紫」北山の〈黄金〉と『遊仙窟』の〈金〉

「若紫」の巻で、光源氏が、瘡病^{わらわび}にかかったため、北山へ忍んで出かける。左大臣の息子たちが、北山へ光源氏を迎えに行った。この場面を引用しよう⁽³⁾。

頭中將、懷なりける笛取り出でて、吹きすましたり。弁の君、扇はかなう打ち鳴らして、「豊浦の寺の西なるや」とうたふ。人よりはことなる君たちを、源氏の君いたううちなやみて、岩に寄りゐるたまへるは、たぐひなくゆゆしき御ありさまにぞ、何ごとにも目移るまじかりける。例の、箏吹く隨身、笙の笛持たせたるすき者などあり。僧都、琴をみづから持てまゐりて、「これ、ただ御手ひとつあそばして、同じうは、山の鳥もおどろかしはべらむ」と、せちに聞こえたまへば、「乱り心地いとたへがたきものを」と聞こえたまへど、けにくからず掻き鳴らして、みな立ちたまひぬ。

(「若紫」二二三〜四ページ)

ここで出てくる笛、箏、笙の笛、琴は、『遊仙窟』で行われる奏樂の場面にも見られる。それだけではなく、樂器の順番も一致している⁽⁴⁾。

十娘喚^と香兒、為^と少府^と設^と樂。金石並奏、簫管間響。蘇合彈^と琵琶、綠竹吹箏。仙人鼓^と瑟、玉女吹^と笙。玄鶴俯而聽^と琴、白魚躍而應^と節。

(十娘香児を喚び、少府の為に楽を設く。金石並び奏し、簫管間に響く。蘇合は琵琶を弾き、緑竹は箏を吹く。仙人は瑟を鼓し、玉女は笙を吹く。玄鶴俯して琴を聴き、白魚は躍つて節に応ず。)

張文成を慰めるために、「神仙の窟」で侍女たちによる奏楽が催された。『遊仙窟』では、笛の代わりに、簫管が出てくる。この簫管は、『日本国語大辞典』で、「笛の一種。」と説明している。また、「玄鶴俯而聴琴、白魚躍而心節」(波線部)という表現は、玄鶴が俯して琴の妙音を聞いて、白魚が躍り出して拍子を合わせるという意味である。侍女たちの見事な演奏技によって、動物までもが感動したのである。この描写は、「若紫」の巻に見られる北山の僧都の「山の鳥もおどろかしはべらむ」(波線部)という発言を連想させる。

光源氏が、帰還する際に、北山の聖や僧都から贈物が贈られた。

聖、御まもりに、独鈷奉る。見たまひて、僧都、聖徳太子の百濟より得たまへりける金剛子の数珠の玉の装束したる、やがてその国より入れたる箱の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺どもに、御葉ども入れて、藤桜などにつけて、所につけたる御贈物ども捧げたまつりたまふ。

(「若紫」二二二ページ)

金剛子の数珠は、聖徳太子の遺愛物である。北山の光源氏像に聖徳太子像が投影されていることは既に指摘されている。『日本靈異記』に、大部屋栖古が、急死した後に、黄金の山で聖徳太子と出会って、蘇生した

話が見られる。『三宝絵』に、聖徳太子の母が、夢で金色の僧を見て、懐妊した話も見られる。聖徳太子の説話において、〈黄金〉はよく出てくる。ただ、聖徳太子の造型を用いたのみならず、北山の僧都が歌で光源氏を金輪王に喩えることが既に指摘されている。

「山水に心とまりはべりぬれど、内裏よりおぼつかながらせたまへるもかしこければなむ。いまこの花のをり過ぐさず参り来む。」

宮人に行きて語らむ山桜風よりさきに来ても見るべく」とのたまふ御もてなし、声づかひさへ目もあやなるに、

優曇華の花待ち得たる心地して深山桜に目こそうつらね

と聞こえたまへば、ほほ笑みて「時ありて一たび開くなるは、かたかなるものを」とのたまふ。聖、御土器賜はりて、奥山の松のそばをまれにあげてまだ見ぬ花のかほを見るかなとち泣きて見たてまつる。

(「若紫」二二〇～二二一ページ)

優曇華は、三千年に一度だけ花が咲く植物であるし、如来や転輪王が出現すると開花する植物でもある。「新編日本古典文学全集」の頭注では、「優曇華」を、「三千年に一度開花し、その時は、仏陀または転輪聖王(正しい法をもって全世界を統治するという理想的な王者)が世に出現する」という、靈瑞」と説明している。転輪王のうち、金の輪宝を感得し、全世界を支配する聖王は、金輪王という。「優曇華」という仏教用語を用いて、金輪王の造型を光源氏に投影して、光源氏の聖王のイメージを滲ませている。保立道久氏は、金輪王が、黄金国家の王の観念であることを指摘している。河添房江氏は、『源氏物語』において、財力の象徴である唐物や〈黄金〉が、光源氏の話とよく結びついたことを指摘して

いる。^⑥北山の光源氏が、〈黄金〉と重なることを無視することは出来ないだろう。

これらの先行研究を踏まえながら、『遊仙窟』を改めて読んでみよう。

①于^レ時金台銀闕、蔽^レ日于^レ雲。或似^レ銅雀之新開、乍如^レ靈光之且敞^一。

(時に金台銀闕、日を蔽ひ雲を干す。或は銅雀の新に開けたるに似、乍ち靈光の且く敞かなるが如し。)

②即相隨上^レ堂。珠玉驚^レ心、金銀曜^レ眼。五彩童鬚席、錦繡緑辺氈、八尺象牙床、緋綾帖薦褥。車渠等宝、俱映^レ優曇花、馬瑙真珠、並貫^レ頗梨之線^一。文栢楊子、俱写^レ豹頭、蘭草燈心、並燒^レ魚腦^一。

(即ち相隨つて堂に上る。珠玉心を驚かし、金銀眼に曜く。五彩童鬚の席、錦繡緑辺の氈、八尺の象牙の床、緋綾の帖薦の褥。車渠等の宝は、俱に優曇の花に映じ、馬瑙真珠は、並びに頗梨の線に貫けり。文栢の楊子は、俱に豹頭を写し、蘭草の燈心は、並びに魚腦を焼く。)

③一時俱坐、即喚^レ香兒取^レ酒。俄尔中間、擊^レ二大鉢可^レ受三升已^一来。金鈕銅鐙。金盞銀盃。

(一時にして俱に坐するや、即ち香兒を喚びて酒を取らしむ。俄尔の中間に、二大鉢の三升を受くる可りなるを撃けて已に來れり。金鈕銅鐙。金盞銀盃。)

①、②、③は、「神仙の窟」の内部の描写である。「神仙の窟」の調度は、

豪華であり、それは、仙境の非日常性を表している。^⑦傍線部が示したように、〈金〉という言葉が頻繁に出てくる。〈金〉は古代において、財力の象徴である。『遊仙窟』は、大量の〈金〉を使って、「神仙の窟」の仙境性を強調していると思われる。そのうち、②に見られる「金」「銀」「車渠」「馬瑙」「真珠」は仏教の七宝の中の五つである。また、「優曇花」(波線部)は、「若紫」の巻の「優曇華」と符号している。とはいえ、『遊仙窟』の「神仙の窟」に見られる〈金〉などの調度は、財力の象徴であるのみならず、仏教的な意味も持っている。また、『遊仙窟』に、〈金釵〉という道具が、繰り返し出てくる。そのうちの一例を引用しよう。

④五嫂遂抽^レ金釵送^レ張郎、因報^レ詩曰、兎今贈^レ君別、情知後会難。

莫言釵意小、可^レ以掛^レ渠冠^一。

(五嫂遂に金釵を抽きて張郎に送り、因って詩を報して曰く、兎今君の別に贈る、情に知りぬ後会の難からんことを。言ふことと莫かれ釵の意小なりと、以て渠が冠に掛く可し、と。)

〈金釵〉は、「神仙の窟」の女性たちのアクセサリーとしてよく描かれている。金属が稀な物である古代において、〈金釵〉も財力の象徴である。それだけではなく、『長恨歌』などに見られるように、〈金釵〉は恋の象徴である。〈金釵〉は楊貴妃の身代りとして皇帝に送ったもので、『長恨歌』に描かれている(空持旧物表深情、鈿合金釵寄將去。釵留二股合一扇、釵擘黄金二分鈿)。④は、張文成と「神仙の窟」の女性たちと別れる際に、五嫂が、張文成に〈金釵〉を贈った場面である。五嫂と、張文成とは「一夜」の関係ではないが、〈金釵〉によって、「恋」

の関係を示している。

財力の象徴としての〈黄金〉は、「若紫」の巻や『遊仙窟』に見られる。しかし、〈黄金〉が「若紫」の巻において、「権力」という象徴が『遊仙窟』においては、見当たらない。また、『遊仙窟』において、「恋」という象徴が、「若紫」の巻にも伺えない。これは、『源氏物語』と、『遊仙窟』との違いの一つとは言えると思われる。

二 「若紫」の登場人物と『遊仙窟』の人物との関係

『遊仙窟』は、仙郷訪問譚である。「若紫」の巻の北山の段も、仙境訪問譚とは言える。^① 田中隆昭氏は、「若紫」の巻が、『桃花源記』の影響を踏まえつつ、『桃花源記』を利用した『遊仙窟』の影響を受けていることを指摘している。^② それは、『遊仙窟』の仙境である「神仙の窟」が、「若紫」の巻に、北山の聖の「洞窟」に変容したということである。新聞一美氏は田中氏の説を受けて、『遊仙窟』の仙境を山の仙境と水の仙境を分け、『源氏物語』の場合も、二つに分けられると指摘している。^③

『遊仙窟』は、主人公の張文成が、出かける途中、「神仙の窟」で、館を見つけて、この館で、十娘と五嫂という二人の未亡人と出会った物語である。短編であるが、張文成はこの十娘と歌を詠み交わし、飲菓の一夜を過ごして、二人はそのまま別れてしまうなどの場面が描かれている。

丸山キヨ子氏は、「若紫」の巻の北山の段を、「わらはやみの加持に北山の聖を尋ねた源氏が気晴らしの眺望を楽しむうち、ふと見下した僧都の小柴垣の内に思いがけぬなまめかしい女性の姿を見た。尼と少女であり、少女の美しさは藤壺にそっくりである。素性を聞けば藤壺の姪に当る娘とか、尼君は少女には祖母にあたる人だった。一途に祖母の尼を尋

ねて歌の贈答をする。」とまとめている。^④ 『遊仙窟』との関係について、丸山氏は、「このあたりまでの部分と遊仙窟冒頭のやりとりが似ている」とも言っている。^⑤

……ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。簾すこし上げて、花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みるたる尼君、ただ人と見えず。四十余ばかりにて、いと白うあてに、瘦せたれど、頬つきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなういまめかしきものかな、とあはれに見たまふ。……中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

〔「若紫」二〇五―六ページ〕

「若紫」の巻で、光源氏は、誑経していた尼君と「白き衣」「山吹」の汗衫を着て、走ってきた紫の上を垣間見た。丸山氏は、この「若紫」の巻の垣間見は、『伊勢物語』の初段で、男が、「女はらから」を垣間見るところから変容していることを指摘している。また、「若紫」の巻は、『伊勢物語』の初段を踏まえつつ、『遊仙窟』も利用していることを論じている。^⑥ つまり、都から離れた地で、男が複数の美しい女性を垣間見て、男が、その美しい女性に慕情を訴えて、女性が、男と応酬することは、『遊仙窟』と一致しているのである。

原岡文子氏は、丸山氏の説を受けているが、紫の上が光源氏の結婚対

象となるに對して、尼君がその仲立ちをするものであることは、『遊仙窟』の十娘が張文成の相手となるのに對して、五嫂が二人の仲立ちをすることから影響を受けたことを指摘している。つまり、『若紫』の巻の尼君と紫の上という二人の女性の構図は、『伊勢物語』の初段の「女はらから」からではなく、『遊仙窟』の十娘と五嫂という構図から変容しているのである。

「若紫」の巻の尼君の遺言に、

「乱り心地は、いつともなくのみはべるが、限りのさまになりはべりて、いとかたじけなく立ち寄せたまへるに、みづから聞こえさせぬこと。のたまはすることの筋、たまさかにも思しめしかはらぬやうはべらば、かくわりなき齡過ぎはべりて、かならずかすまへさせたまへ。いみじう心細げに見たまへおくん、願ひはべる道のほだしに、思ひたまへられぬべき」など聞こえたまへり。

(若紫)二二六〇七ページ)

とある。「かくわりなき齡過ぎはべりて、かならずかすまへさせたまへ」(傍線部)によって、尼君が、紫の上の後見看を光源氏に託したのである。一方、『遊仙窟』には、

五嫂因起謝曰、……、女因媒而嫁、不因媒而親。新婦向來專心為勾当、已後之事不敢預知。娘子安穩、新婦向房臥去也。

(五嫂因つて起つて謝して曰く、……、女は媒に因つて嫁するも、媒に因らずして親し。新婦向來心を専らにして勾当を為せども、已後の事は敢て預り知らず。娘子安穩せよ、新婦は房に向

つて臥し去らん、と。)

とある。五嫂は、十娘と張文成の仲人の役として描かれている。纏めてみると、『若紫』の巻の人物と『遊仙窟』の人物とは、次のような関係を持っていることになる。

光源氏—張文成　尼君—五嫂　紫の上—十娘

しかし、『遊仙窟』に登場している五嫂は若い美しい女性である。

下官爲性貪多、欲兩花俱採。答曰、暫遊双樹下、遙見兩枝芳。向日俱飄影、迎風並散香。戲蝶扶丹尊、遊蜂入紫房。人今惣摘取、各著一辺箱。

五嫂曰、張郎太貪生、一箭射兩塚。十娘則謂曰、遮三不得一、覓兩都尽失。

(下官性と爲り貪る多く、兩花俱に採らんを欲し、答へて曰く、暫双樹の下に遊び、遙かに兩枝の芳しきを見る。日を向つて俱に影を飄し、風を迎へて並びに香を散す。戲蝶丹尊に扶まり、遊蜂紫房に入る。人今惣て摘み取りて、各々一辺箱に著かん、と。五嫂曰く、張郎は太貪なり、一箭に兩塚を射んとす、と。十娘則ち謂つて曰く、三を遮らば一をも得ず、兩を覓めば都て失はん、と。)

張文成が、「神仙の窟」が行われている酒宴で、十娘と五嫂を共に手に入れようとして(欲兩花俱採)、「人今惣摘取、各著一辺箱」と言った。ところが、五嫂と十娘に諫められて、「兩花」を並べて採ることが

実現できなかった。それと比べると、「若紫」の巻に登場している紫の上が、ただ「十ばかり」の童女で、光源氏と歌を贈答した尼君が「四十余ばかり」の嫗なので、十娘と五嫂のような若い美しい女性とはかなり距離がある。この童女と嫗という構図は、むしろ『遊仙窟』に受容した一種の変容とは言えるだろう。

三 「若紫」の「飲楽の一夜」

『遊仙窟』の「飲楽の一夜」という話が印象的である。しかし、丸山氏は、「若紫」の巻の北山の段においては、この「一夜」の話を再現していないと主張している。一方、田中氏は光源氏が、北山の僧の邸でなかなか眠れない「一夜」が、『遊仙窟』の「一夜」に影響を受けたと指摘している。

ところで、『遊仙窟』は短編作品なので、話の展開が速い。

『遊仙窟』の展開の速さと違い、「若紫」の巻の「一夜」の話が、光源氏は再び紫の上の邸に訪れた際に描かれていると思われる。それと関連した部分を挙げる。

忌みなど過ぎて、京の殿になど聞きたまへば、ほど経て、みづからのどかなる夜おはしたり。いとすげに荒れたる所の、人少ななるに、いかに幼き人おそろしからむと見ゆ。例の所に入れたてまつりて、少納言、御ありさまなど、うち泣きつつ聞こえつづくるに、あいなう御袖もただならず。

(「若紫」二四〇ページ)

光源氏は、正妻である葵の上との関係は不和であるし、藤壺への恋も挫

折した。悩みながら、光源氏が、紫の上の邸へ訪れた。

祖母である尼君を失った紫の上は、乳母の少納言とともに、荒れた邸に住んでいる。紫の上の実父である兵部卿の宮は、正妻に憚って、紫の上を宮家に迎えることができない。そのため、紫の上の面倒を見る人は、ただ乳母の少納言一人である。この情況で、光源氏は、紫の上のもとに押し入った。

君は、上を恋ひきこえたまひて泣き臥したまへるに、御遊びがたきどもの、「直衣着たる人のおはする。宮のおはしますなめり」と聞こゆれば、起き出でたまひて、「少納言よ。直衣着たりつらむは、いづら。宮のおはするか」とて、寄りおはしたる御声、いとらうたし。「宮にはあらねど、また思し放つべうもあらず。こち」とのたまふを、恥づかしかりし人と、さすがに聞きなして、あしう言ひてけり、と思して、乳母にさし寄りて、「a いざかし、ねぶたきに」とのたまへば、「b いまさらに、など恐びたまふらむ。この膝のうへに大殿籠れよ。いますこし寄りたまへ」とのたまへば、乳母の、「さればこそ。かう世つかぬ御ほどにてなむ」とて、押し寄せたてまつりたれば、何心もなくゐたまへるに、c 手をさし入れて探りたまへれば、なよかなる御衣に、髪はつやつやとかかりて、末のふさやかに探りつけられたる、いとうつくしう思ひやらる。d 手をとらへたまへれば、うたて、例ならぬ人の、かく近づきたまへるは、恐ろしうて、「寝なむといふものを」とて強ひて引き入りたまふにつきて、すべり入りて、「今は、まろぞ思ふべき人。なうとみたまひそ」とのたまふ。「いで、あなうたてや。ゆゆしうもはべるかな。聞こえさせ知らせたまふとも、さらに何のしるしもはべらじものを」

とて、苦しげに思ひたれば、「さりとも、かかる御ほどをいかがはあらん。なほ、ただ世に知らぬ心ざしのほどを見はてたまへ」とのたまふ。
〔若紫「二四一—二ページ」〕

紫の上が、乳母に、「いざかし、ねぶたきに」(傍線部 a)と声をかけているが、光源氏は、「いまさらに、など忍びたまふらむ。この膝のうへに大殿籠れよ。いますこし寄りたまへ」(傍線部 b)と言っている。また、「手をさし入れて探りたまへれば、なよやかなる御衣に、髪はつやつやとかかりて、末のふさやかに探りつけられたる」(傍線部 c)とあるように、光源氏が、紫の上の着物や、髪を探っている。これだけではなく、「手をとらへたまへれば」(傍線部 d)とあるように、光源氏は、紫の上の手を捕まえた。

霰降り荒れて、すぎき夜のさまなり。「いかで、かう人少なに、心細うて過ぐしたまふらむ」とうち泣いたまひて、いと見捨てがたきほどなれば、「御格子まゐりね。もの恐ろしき夜のさまなめるを、宿直人にてはべらむ。人々近うさぶらはれよかし」とて、eいと馴れ顔に御帳の内に入りたまへば、あやしう思ひの外にも、とあきれ、誰も誰もあたり。乳母は、うしろめたうわりなしと思へど、荒らましう聞こえ騒ぐべきならねば、うち嘆きつつあり。若君は、いと恐ろしう、いかならんとわななかれて、いとうつくしき御肌つきも、そぞろ寒げに思したるを、fらうたくおぼえて、単衣ばかりを押しくくみて、わが御心地も、かつはうたておぼえたまへど、あはれにうち語らひたまひて、「いざたまへよ。をかしき絵など多く、雛遊びなどする所に」と、心につくべきことをのたまふけはひの、

いとなつかしきを、幼き心地にも、いといたう怖ぢず、さすかにむつかしう、寝も入らずおぼえて、身じろき臥したまへり。
〔若紫「二四四—五ページ」〕

光源氏は、まだ幼い紫の上が、こんな霰が降って風も荒い夜に、一人で過ごすことができないため、「いと馴れ顔に御帳の内に入りたまへば」(傍線部 e)とあるように、几帳の中に入った。「らうたくおぼえて、単衣ばかりを押しくくみて」(傍線部 f)とあるように、光源氏は、紫の上に単衣だけを着せている。光源氏自身も、紫の上の傍に、横になっている。

夜ひと夜風吹き荒るるに、「げにかうおはせざらましかば、いかに心細からまし。g同じくはよろしきほどにおはしまさましかば」とささめきあへり。乳母は、うしろめたさに、いと近うさぶらふ。風すこし吹きやみたるに、夜深う出でたまふも、事あり顔なりや。「いとあはれに見たてまつる御ありさまを、今はまして片時の間もおぼつかかなかるべし。明け暮れながめはべる所に渡したてまつらむ。かくてのみはいかが。もの怖ぢしたまはざりけり」とのたまへば、「宮も御迎へになど聞こえのたまふれど、この御四十九日過ぐしてや、など思つたまふる」と聞こゆれば、「頼もしき筋ながらも、よそよそにてならひたまへるは、同じうこそ疎うおぼえたまはめ。h今より見たてまつれど、浅からぬ心ざしはまさりぬべくなむ」とて、かい撫でつつ、かへりみがちにて出でたまひぬ。

〔若紫「二四五—六ページ」〕

この光景を目に入れた侍女たちが、光源氏と紫の上のことを、「同じくはよろしきほどにおはしまさましかば」(傍線部g)と言っている。一夜が明けて、光源氏は、再び紫の上を二条の院に迎えることを求めた。

しかし、少納言が、紫の上の父である兵部卿宮も迎える準備をしていることを理由に、光源氏を断った。光源氏は、「今より見たてまつれど、浅からぬ心ざしはまさりぬべくなむ」(傍線部h)と言って、今の自分と紫の上の間に深い絆を築いていると主張している。

以上の描写は、『遊仙窟』のように露骨に描かれていないが、平安時代の貴族男性である光源氏にとっては、「歓楽の一夜」とは言えるが紫の上にとっては、ただ恐怖の一夜に過ぎなかっただろう。実事がないこの「一夜」と、『遊仙窟』の「歓楽の一夜」とは齟齬が見られる。だが、「歓楽の一夜」はもちこされて、後に紫の上を二条の院に連れて行ったことによって、光源氏と紫の上の間に、「歓楽の一夜」が実現できたと思われる。

まとめに

『源氏物語』の「若紫」の巻の北山に登場している、光源氏、尼君、紫の上は、『遊仙窟』の張文成、五嫂、十娘と対応関係を持っている。それだけではなく、『若紫』の巻には、『遊仙窟』の「歓楽の一夜」が描かれていないが、光源氏が、紫の上と風が吹き荒れる一夜をともしにして、後に紫の上を二条の院に連れて行ったことなどがある。光源氏と紫の上の間に、「歓楽の一夜」が実現できた。これは、短編の『遊仙窟』を長編物語に置かせた一種の変容とは言えるだろう。また、「北山」に見られる楽器、唐物などにも『遊仙窟』の影響が見られる。ところで、『遊

仙窟』と「若紫」の巻とでは、先に述べたように、〈黄金〉のイメージに食い違いが見られる。それは、「若紫」の巻における『遊仙窟』の受容が、単なる引用ではなく、物語の自身の世界があるであろう。

注

- (1) 丸山キヨ子「源氏物語・伊勢物語・遊仙窟―わかむらさき北山・はし姫宇治の山荘・うひかうぶりの段と遊仙窟との関係―」『源氏物語と白氏文集』「東京女子大学学会研究叢書3」昭和39年8月、田中隆昭「光源氏の北山行―若紫巻の桃源郷の世界―」『源氏物語の思惟と表現』新典社、平成9年、「源氏物語と遊仙窟―若紫巻と夕顔巻を中心に―」『源氏物語と唐代伝奇』青簡舎、平成24年)など。
- (2) 前注の丸山氏の論文。
- (3) 特にことわりがない限り、古典本文の引用は小学館「新編日本古典文学全集」による。「遊仙窟」の本文は、『遊仙窟全講増訂版』(八木沢元 明治書院)を参照した。
- (4) 注(1)の田中氏の論文。
- (5) 『日本国語大辞典』(第二版 小学館)
- (6) 『河海抄』(玉上琢彌編 角川書店 昭和53年)には、「或人云法隆寺太子の御たから物の中に念珠函三連いまにあり其中金剛子念珠一連あり又彼寺の縁起にもみえたり」とある。
- (7) 堀内秀晃「光源氏と聖徳太子信仰」『講座源氏物語の世界』第二集 有斐閣 昭和55年)
- (8) 観之道頭有「黄金山」。即到炫_二面。爰覺聖德皇太子待立。共登_二山頂_一。其金山頂居_二一丘丘_一。『日本靈異記』上巻、「信敬三宝_二得_二現報_一」緑 第五による。
- (9) 昔上官太子中聖イマシキ。用明天皇ノハジメテ親王ニイマセシ時ニ、穴太郎ノ真人ノ皇女ノ腹ニムマセ給ヘル御子也。ハジメハ母ノ夫人ノユメニ_{金色ノ}僧アリテ云、我ヨヲスクフ願アリ。願ハ暫ク御腹ニヤドラム。我ハ救世菩薩也。家ハ西方ニアリ。トイヒテ、ヲドリテ口ニ入ヌトミテ懐妊シ給ヘ

- り。〔三寶絵〕中（一聖徳太子）〔新編日本文学大系〕による。）
- (10) 注(7)の論文。
- (11) 『佛教語大辞典』（東京書籍 昭和56年）
- (12) 『源氏物語』（『新編日本古典文学全集』）①、「若紫」、二二〇ページ、頭注一〇番。
- (13) 注(7)の論文。
- (14) 保立道久『黄金国家』（青木書店 平成16年）
- (15) 河添房江『若紫巻の光源氏と唐物—瑠璃壺・金剛子の数珠・黄金』（『源氏物語時空論』東京大学出版社 平成17年）
- (16) 空持『旧物』表・深情、鈿合金釵寄將去。釵留一股合一扇、釵擘黄金合分鈿（『白氏文集』二下 「新釈漢文大系」 平成19年）
- (17) 拙論は、「若紫」の巻の「北山」が、「遊仙窟」の「神仙の窟」の要素が見られるし、「北山の僧都」という人物も『遊仙窟』の影響が受けられたことを論じている。（『言語・文学研究論集』（16）白百合女子大学言語・文学研究センター 平成28年）
- (18) 田中隆昭「北山と南岳—若紫巻の仙境的世界」（『源氏物語引用の研究』勉誠出版 平成11年）
- (19) 新間一美「源氏物語夕顔巻と遊仙窟—「邂逅相遇」の物語—」（『源氏物語とアジア』新典社 平成22年）
- (20) 注(1)の論文。
- (21) 注(1)の論文。
- (22) 注(1)の論文。
- (23) 原岡文子『源氏物語 若紫』（有精堂校注叢書 昭和63年）。『伊勢物語』初段の「女はらから」の設定そのものが既に『遊仙窟』を踏まえてのものとおぼしきことはもとより、『遊仙窟』を直接に該当巻が受容しているのではないかと考えられる点もなくはない。」と論じている。
- (24) 注(18)の論文。